

西館の祭りは 世代を越えて

熊野神社式年五年大祭の記録



西館
にし たて
公民館
岩手県大船渡市末崎町

「東日本大震災 芸術・文化による復興支援ファンド」助成事業



西館の祭りは 世代を越えて

熊野神社式年五年大祭の記録

平成23年3月の東日本大震災により碁石地区は大きな被害を受けました。碁石5地域のうち、西館、泊里、碁石、三十刈の被害は特に大きく、私たち西館地域では43世帯中38戸が津波の被害を受けました。

私たちの地区には30年近く前の記録史料にも残る、熊野神社の例大祭があります。この4年に1度の祭りは碁石方面9地域から出る郷土芸能や華やかな手踊りの行列で賑わうもので、西館からは男たちの虎舞、女たちの手踊り、そして子ども達の七福神舞が奉納されました。

震災の翌年、平成24年はちょうど祭りに当たる年でした。神社事務所も被災し、祭り装束・道具なども流され、何より多くの人命も犠牲となった困難な状況の中、私たちの地区は祭りの継続を決めました。祭りを行なうことで前を向き、地域一丸となって復興に向かいたいと考えたからです。

西館では様々な団体から暖かい支援を受けて舞の衣装や道具を新調し、子ども達と練習を重ねて大祭での郷土芸能復活へ準備を進めてきました。祭りの日、手踊りは奉納できませんでしたが、虎舞や七福神舞は震災後はじめて奉納することができ、その姿は私たちに大きな感動と元気を与えてくれました。

いま碁石地区では高台移転計画が進んでいます。すでに地域を後にした方もいます。今後、住み慣れた土地での暮らしや地域の絆が変化していても、代々受け継がれてきた郷土芸能はぜひ伝えていきたい、そんな思いを共有するためにこの冊子は編まれました。私たちがどんな気持ちで郷土芸能を復活させたのか、また地域の中でこれまでどのように郷土芸能が伝えられてきたのかを記録し、子ども達に伝えたい、そのような思いで作られたものです。この冊子が、素晴らしい芸能を未来に伝えていくための、ひとつの手掛かりになればと願っています。

目次

平成24年

熊野神社大祭の記録

2

準備／奉納／行列／
御旅所／海上渡御／
行列／舞納め／カサコシ
(付 行列経路図)

小さな神様たちの舞

西館子ども七福神

26

ぼくたち、

わたしたちの七福神

29

七福神の由来を語る

35

思い出写真帖

36



※このうち泊里、西館、碁石、三十刈、山根は、かつては泊里5部落、現在は碁石5地区と呼ばれる、地域的な繋ぎの深い地区です

表紙題字 村上征一

表紙写真 熊野神社での虎舞の奉納

表紙裏 麻腐島へ渡御する宮司・志田隆人氏と神輿

熊野神社 大祭の記録

平成 24 年度の大祭の記録を
地域の共有アルバムとしてまとめました



3. 指導に励む大和田利郎さん
4. 扇をまわす基本の動きとリズムを繰り返して練習する子どもたち
5. 祭り前日の朝、熊野神社にて。本番さながらの「揃え」
6. ほほえましく見守る大先輩たち
7. 朝一番に熊野神社にご挨拶

4	3
6	5
7	



練習と揃え

碁石地区コミュニティセンター
熊野神社

1. 祭り前夜の練習風景（碁石地区コミュニティセンター）



祭りに向けての練習は20日間ほど行なわれます。震災前は西館公民館新館で手踊りと七福神、公民館旧館で太鼓、まるたけ商店（カソリンスタンド）で虎舞と、別々に練習していましたが、これらの施設がすべて流されてしまったため今回は碁石地区コミュニティセンターを借りて練習をしました。

今回出演した七福神の子どものうち、4年前の前回大祭に出演したのは2名だけ。初めて出演する子どもたちは緊張気味でなかなか踊りを覚えられず、見守る大人たちも心配顔でしたが、練習を重ねるうちに日々向上していきました。舞の師匠は西館文化部長の武田隆さんと太夫（謡い）の大和田利郎さんが中心ですが、多くの大人たちは経験者なので、一緒に指導を見守りフォローしてくれました。大正生まれの武田トシ子おばあちゃんが、弁天様のしぐさを指導する場面もありました。

一方で流された衣装や道具を新調する準備も進められました。虎舞の装束や笛太鼓、半纏などは購入することができましたが、七福神の衣装と小道具は地域住民の手作りです。準備期間の短期中、みんなで協力して何とか祭りに間に合わせることができました。経費は日本財団や（公財）岩手県文化振興事業団の全面的支援を受けることができ、大変感謝しています。

いよいよ祭り前日になると、当日と同じ衣装を着て熊野神社で踊りを奉納します。これを「揃え」と言い、神様への事前のご挨拶の意味があるようです。



2. 震災前は軽トラックに社殿風屋根を取り付け、太鼓を据え付けた屋台だった。前面にはインド孔雀に牡丹、背面には白孔雀と牡丹、軒隅には角ぼんぼりを吹き流し華やかだった。屋台は別の倉庫に保管してあったので被災をまぬがれたが、飾り付けの余裕がなかったため今回はシンプルな屋台となった



14



15



16



17



9



11



10



13



12



🕒 05:00
準備の開始
碁石地区コミュニティセンター



8. (公財) 岩手県文化振興事業団の支援を受けて作った西館組の半纏。色はピンクと紫の2色。「西館七福神」と書かれた赤い半纏も、日本財団の支援を受けて作りました

平 成25年10月28日、いよいよ祭り当日です。例年は女性の手踊りがあって準備に時間がかかるため、大人たちは午前2時から準備を始めていましたが、今年は七福神と虎舞だけなので5時に準備がスタートしました。いつもは寝起きの悪い子どもたちも気が充実しているためか、きりっとして頼もしい表情です。震災前までは手踊りの女性たちのためにプロのメイクの方を2名ほど頼んでいましたが、今回は地域住民の手で子ども達の化粧を行ないました。着付けは西館婦人部の担当。みんな力を合わせて子どもたちを飾りたてます。子どもたちも練習の時にはふざけたりしていましたが、身支度を整えたら緊張感が出て来たのか、おとなしく本番を待ちます。準備がすべて整った後、出発前に碁石地区コミュニティセンターの前で記念撮影を行いました。

9. 村上直美さんを中心としたお母さん達が弁天様づくりに励みます 10. おばあちゃんたちも着付けでお手伝い 11. 大黒様の武田慎之介くん 12. 弁天様の村上美優ちゃん 13. 弁天様の金優花ちゃん 14. 恵比寿様の志田登生くん 15. 武田慎之介くんとお母さん 16. 寿老人の志田哉希くん 17. さいぼう振りの尾崎玄伽くん

🕒 7:30
舞の奉納
熊野神社 社殿前



祭りは、朝一番に熊野神社に虎舞を奉納するところから始まります。碓石地区コミュニティセンターから約10分の道のりを、「西館」と書かれた旗を先頭に行列し、神社で出番を待ちます。今年参加した祭り組からそれぞれ虎舞や七福神が出て順番に奉納しますが、西館は今年、最終番の奉納となりました。子どもたちは緊張した面もちです。

奉納は大人たちの虎舞からはじまり、七福神、手踊りと順番が決まっています。祭りに出る七福神は、現在では小学生の子ども達が舞います。かつては子どもがたぐさんだったため、七福神になれるのは限られた子どもたちだけでしたが、子どもの数が減ったため、近年は全員が出演し、ひとつの役を何人かで行なうようになっていきます。今年は大黒様が2人、寿老人が2人、弁天様が3人いました。さいぼう振りは就学前の子どもの達が務めました。扇子と櫛を手に虎舞の前に立ち、邪気をはらうために一生懸命舞います。虎舞は若者や若いお父さんたちが務めます。

いつも見慣れた舞ですが、住民たちは特別の思いで見守りました。子ども達もこれに応え、元気いっぱい舞ってくれました。

すべての地域の奉納が終わると、行列の呼び出しがかり、海上渡御のために行列を組んで海岸へと向かいます。

21	18
	19
22	20
23	

18. 寿老人の村上楓くん 19・20. おひげは大和田利郎さん担当 21. めんこい弁天様できあがり 22. 「おめえの顔、変だぞ」「おめえもだ！」 23 女性の手踊りがなかったため例年より人数は少ないもののみんな元気いっぱいです。門出の前の西館住民（碓石地区コミュニティセンター前）





- 24. 境内の下で出番を待つ西館組
- 25. 神社の境内で待つ。新調した旗は西館シンボルカラーの赤。旗手を務めるのは村上将彦さん
- 26-28. 熊野神社での虎舞の奉納は西館が発祥とされています。胴体は虎、頭は赤い獅子で、頭が平べったいのが特徴。男性2人が入って舞いますが、動きが激しいため舞の最中に交代します(28)
- 29. さいぼう振りに子ども七福神も加わり、虎舞を盛りたてます
- 30-32. 虎舞が終わると、いよいよ子ども達の七福神の出番です。みんな少し緊張気味の様です

29	26		24
30			
31	27	25	
32	28		



出演メンバー

- 【虎舞】
- 佐々木 栄一
- 武田 浩太郎
- 尾崎 英明
- 金野 竜一
- 尾崎 祐一
- 【さい棒振り】
- 尾崎 玄伽
- 武田 鉄平
- 【大夫(謡い)】
- 大和田 利郎
- 尾崎 秀(大黒天)
- 武田 慎之介(大黒天)
- 志田 登生(恵比寿)
- 尾崎 風伽(福祿寿)
- 大和田 涼太(毘沙門天)
- 志田 哉希(寿老人)
- 村上 楓(寿老人)
- 大和田 優羽(弁財天)
- 金 優花(弁財天)
- 村上 美優(弁財天)



尾崎玄伽(4歳)

武田鉄平(4歳)

①

8:30

神輿渡御

熊野神社～御旅所

行列では熊野神社と八幡神社の神輿を1基ずつ御六尺が担ぎ、それに各地域の行列が従います。御六尺は9地域からそれぞれ選出した総勢48名で、前夜から熊野神社で夜籠りをしています。西館では全世帯から順番に4名の御六尺を出すのですが、今年は参加できなかった地域があったため、1名増やして5名が御六尺を務めました。

行列は、かつて泊里港まで練り歩いたものでした。まさにこの泊里湾に浮かぶ麻腐島へ宝物が流れつき、そこから熊野神社が興ったと伝えられているからです。しかし泊里港は震災によって大きな被害を受けたため、今年は隣の門之浜港までの行列となりました。震災前の行列は泊里地域の狭い家並みの中を練り歩き、沿道にあふれた見物客や手踊りの賑やかな音楽でそれは華やかなものでした。今回、家々が流されて原っぱのようになった一帯を長い行列と囃子の音が進む姿には、震災を乗り越えていこうとする地域住民の意思がこめられているようでした。

※地図上の数字は本誌掲載の写真番号で、撮影された場所と撮影した方向を示しています

神輿渡御行列順序

- 1 呼出：責任役員・総代
- 2 御先祓：総代
- 3 御塩まき：御六尺
- 4 八幡神社猿田彦：御六尺
- 5 復興絆組一船神輿
- 6 立切
- 7 太鼓：御六尺
- 8 立切
- 9 大麻持：総代熊野神社・総代八幡神社
- 10 大麻司：神職
- 11 立切
- 12 祓主：祭員
- 13 立切
- 14 小櫛
- 15 立切
- 16 碁石組（行き）／西館組（帰り）
- 17 立切
- 18 大櫛
- 19 奉納供物
- 20 立切
- 21 社名旗
- 22 立切
- 23 四神旗：総代
- 24 立切
- 25 立切
- 26 立切
- 27 大櫛：総代
- 28 立切
- 29 立切
- 30 立切
- 31 山根組（行き）／三十刈組（帰り）
- 32 小櫛
- 33 立切
- 34 奉幣持（唐櫃）：総代
- 35 献幣使随員：神職
- 36 献幣使：神社庁気仙支部長
- 37 御宝刀
- 38 八幡神社ぼんでん：御六尺
- 39 三十刈組（行き）／山根組（帰り）
- 40 祭員：神職
- 41 熊野神社猿田彦：御六尺
- 42 大祭委員長
- 43 熊野神社ぼんでん：御六尺
- 44 御神鏡
- 45 御宝物
- 46 西館組（行き）／碁石組（帰り）
- 47 副齋主
- 48 御塩まき：御六尺
- 49 八幡神社御神輿：御六尺（12名）
- 50 賽銭籠：熊野神社神輿御六尺
：八幡神社御神輿御六尺
- 51 齋主：神職
- 52 熊野神社御神輿：御六尺
- 53 門中組
- 54 小河原組
- 55 梅神組
- 56 警護：消防団員



平成24年の曳船ルート

震災前曳船ルート：碁石岬沖まで航行して帰って来る



- 33. 御六尺が担ぐ八幡神社の神輿が行列の先頭に立ちます
- 34. 八幡神社の神輿に、熊野神社の神輿が続きます
- 35. 震災前まで境内の下のこの空間に社務所があり、この庭で各地域が行列の順番を待つものでした
- 36. 三十刈組の行列や熊野神社の猿田彦さるたひこに続き、西館組の行列が続きます
- 37. 八幡神社の猿田彦
- 38. 浸水地域をゆく行列（木戸脇下）。4年後の祭りでは泊里湾からの船渡御を復活したいものです
- 39. 飾り気のない屋台。今年はこれで我慢！太鼓は中学生以上の若者の担当です
- 40. さいぼう振りの鉄平くん、お母さんと歩く
- 41. 「お前の腹でけえなあ」
- 42. 休憩所の前にて
西館組一行

41	39	34	33
	40	35	
42		37	36
		38	





① 9:30 ~
舞の奉納
海上渡御
御旅所 (門之浜港)



43

御 旅所おたごじよの門之浜港に着くと、各地域による郷土芸能の奉納が始まります。震災前、泊里港が御旅所であった時は、踊りの場所が狭く、各地域の手踊りの音楽も飛び交って、いわゆるお祭り騒ぎといった賑やかしい雰囲気でしたが、今回は場所も広く、手踊りがなかったために各地域が順番に演じていきました。雰囲気は大きく変わりましたが、おかげで他の地域の奉納もゆっくと見物することができました。また、観客が激減して寂しいお祭りになってしまいかと心配していました。平年の8割くらいの方が見に来てくださり、大いに盛り上がりました。子どもたちも2度目の奉納とあって、だいぶ緊張がほぐれたようでした。

舞が賑やかに奉納されている一方で、浜では海上渡御が行なわれます。2基の神輿ひまわねの前に宮司さんが祈祷をした後、神輿と御六尺ともども、曳船ひきぶねに乗り込みます。船はかつて宝物が流れたという麻腐島まで航行し、そこで祈祷をしてから帰港します。

例年は、全地域あわせて15艘の曳船が出たものですが、今年には被災した船の復旧が間に合わず、8艘のみの海上渡御となりました。しかし、フライキ(大漁旗)がたくさん掲げられた曳船は勇壮で、とても晴れがましい気持ちになりました。西館からは武田隆さんの船1艘が出ました。

海上渡御が無事に終わり、芸能の奉納も終わると、ふたたび行列を組んで、もと来た道を熊野神社へと帰っていきます。



46



44



45

43. 門之浜湾を望む。色とりどりの半纏はんてんにセイタカアワダチ草がはからずも色を添えている
44. 八幡神社の神輿がお旅所に到着 45. 門之浜港の御旅所。門之浜からの曳船出港に、見守る箱根山もびっくり 46. 虎を着込んだ尾崎祐一さん



57



55



56



59



58



60



48



47



50



49



52



51



54



53

55・56. 船渡御前の祈禱 57. 今年のフライキは復興フライキだ 58. 船に乗った御六尺さんたち「一杯やるか。」この日は波がとて高かった 59.「お一重かったなあ!」「肩ひりひりだよ!」 60. 門之浜湾から太田団地(小河原地区)を望む。かつてここには住宅が立ち並んでいた。高台には末崎中学校が見える

47.「じょいわな! じょいわな!」 48.「あーくま(悪魔) 祓ってじょいわな!」と回る。でもさいぼう振りが回ってないぞ... 49. 交代の瞬間! 尾崎英明さん 50.「ふーっ、きつい!」佐々木栄一さん 51. 後姿も絵になる神様たち 52. 大勢が見守るなかで堂々とした演技 53. 七福神の楽隊、笛太鼓も準備万端で待機 54. 勇歌(さすけ) 君も幼い頃演じた寿老人を後輩・哉希君に託す



66・67. 船渡御がおわり、ふたたび熊野神社へ 68. 道中踊りながら帰路につく勇款君
69. 立切（たちきり）の皆さまもおつかれさまでした 70. 御旅所を後にするお神輿さんたち 71. やっと熊野神社に帰還！

61. 熊野神社の御召（おめし）船 62. 曳船は出港し、門之浜湾の御旅所は芸能の奉納でにぎわっている
63. 麻腐島付近を航行する八幡様の曳船。左手の島が麻腐島。後ろに見えるのは基石地域 64・65. 帰航した熊野神社の神輿



72. 寿老人、尾崎良・凰伽親子の競演 73. 親子競演に観客の笑顔もはじけます 74. 三人娘の弁天様
75. 尾崎俊二さん、バチを持たば水を得た魚のよう！ 76. 哉希君、「俵の上で驚いた！」と渾身のジャンプ
77. 2人目の恵比寿様は基石の御六尺さん

① 11:30
社殿還御
舞の奉納
熊野神社



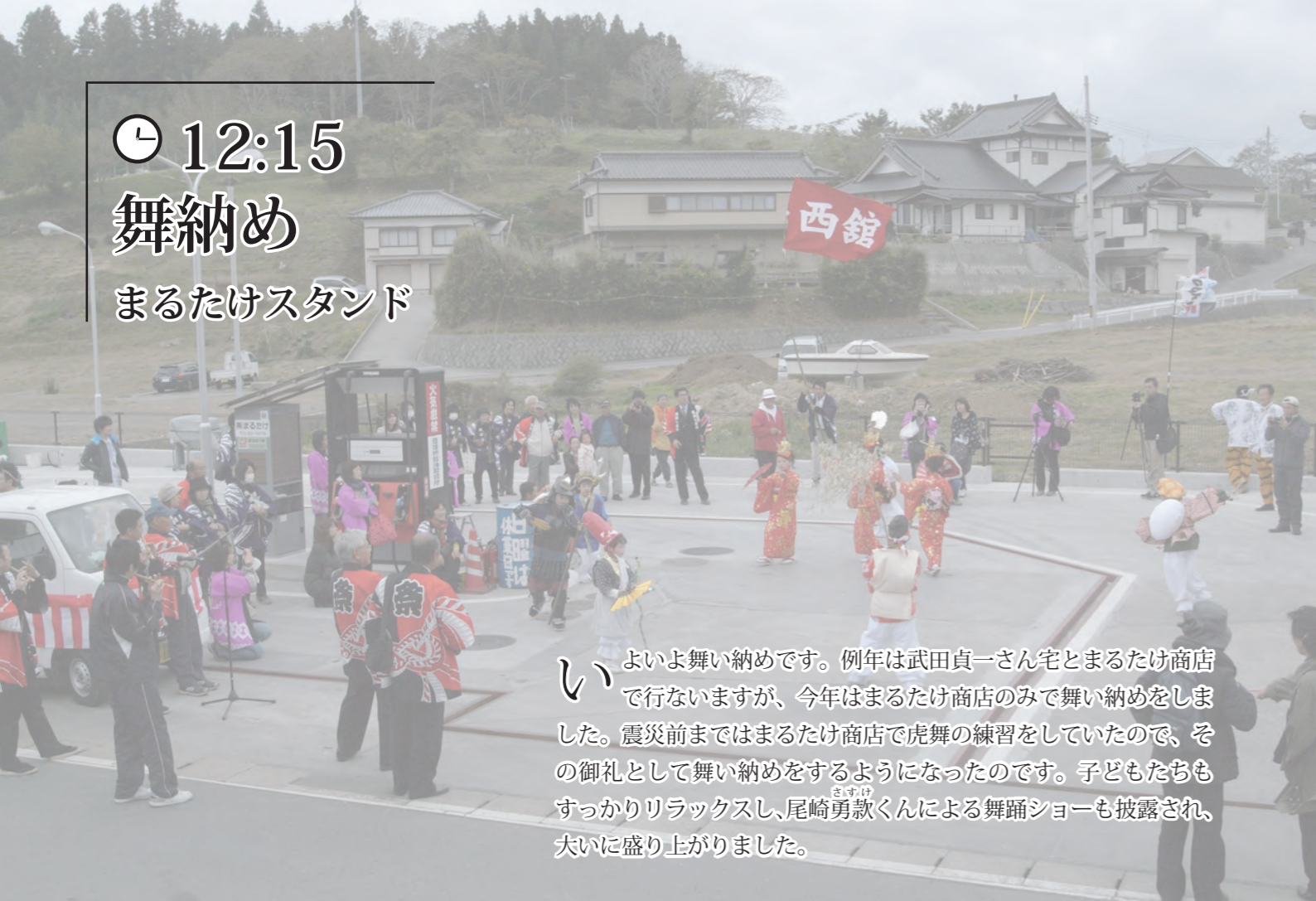
行列の神輿は熊野神社へと戻り、御六尺の手によって神社に還御されます。平年はすべての祭り組が神輿と一緒に神社に戻って虎舞や七福神を奉納するのですが、今年も御旅所が遠かったため、西館組のみが神社へ戻り、芸能を奉納しました。本日3度目の奉納です。虎舞に続く七福神舞では、御六尺の役目を終えた大人たちが乱入し、子どもたちと一緒に踊る場面も見られました。大人たちもかつてはみんな七福神を踊ったベテランたち。大きくユーモラスな動作で、大いにみんなを盛り上げました。境内で見守る住民たちも、いろいろな思いを抱いていました。西館では、公民館も祭りの衣装・道具も流され、当初、今回の祭りには参加できないと諦めていました。しかし、幸いにも衣装や道具を新調するための支援を受けることができ、郷土芸能だけでも継続できたことは本当にうれしいことでした。一生懸命に舞を舞った子どもたちにも、子どもたちなりの思いがあったに違いない、そう感じさせるひと時でした。

また、みんなが力をあわせて今回の祭りを復活させたことで、地域としての繋がりが強まったようにも感じられました。

🕒 12:15

舞納め

まるたけスタンド



いよいよ舞納めです。例年は武田貞一さん宅とまるたけ商店で行ないますが、今年はまるたけ商店のみで舞納めをしました。震災前まではまるたけ商店で虎舞の練習をしていたので、その御礼として舞納めをするようになったのです。子どもたちもすっかりリラックスし、尾崎勇款^{さすけ}くんによる舞踊ショーも披露され、大いに盛り上がりました。

78・79. 御六尺の手によって神輿が還御されます。神様、おつかれさまでした 80. 熊野神社本殿前での西館組の集合写真は初めてのこと。みんな満足気なよい表情です 81. 恵比寿様は登生くん。鯛はさいぼう振りの尾崎玄伽くん 82. 尾崎勇款くんによる舞踊ショー。今日は凛々しい男舞です 83. 武田慎之介くん、いつもキャッチボールしているスタンドで、今日は大黒舞だ！





87



86



92



88



93



90



89



94



91



🕒 16:00
カサコシ

碓石地区コミュニティセンター

例年、祭りの後には西館公民館で「かさこし」が行なわれたものでした。かさこしは「笠壊し」が語源とも言われ、祭りの終わりを告げるとともに、お互いの労をねぎらうための反省会でもあります。飲んだり食べたり、歌ったり踊ったりと賑やかで、少しお酒の入った大人たちによる七福神舞も披露されて会場は大盛り上がりです。七福神を一生懸命舞った子どもたちもその努力を認められ、ねぎらいの言葉をかけてもらいます。今年のかさこしは碓石地区コミュニティセンターを借りて、祭りの当日に行ないました。地域をすでに離れてしまった家族もあったため参加人数が少なく、例年に比べると静かな祭りの幕引きとなりました。



85



84

西館こども七福神

西館のこども七福神の語いと
お祭りで舞った小さな神様たちです



福祿寿 尾崎鳳伽(小2)

ああ、めでたいや めでたいや
めでたい事を申するならば
鶴は千年 亀は万年
浦島太郎は 八千年
東方朔は 九千年
何舞と申すも かに舞と申すも
何から かにから 舞いできて
今日 この場に 出会った
上座に座りしお旦那衆
下座に下がりしお若い衆
あたりに立ったる娘達
おんどけないで びれないで
ざつくと囃して賜うらば
七福神とも舞ってやれ
(ハア ミツサイナ
ミツサイナ ミツサイナ)

ああ、六つで無病 福祿寿
頭も長く 髭長く
家内は和合で末広く
夫婦の仲も睦まじく
睦まじく 睦まじく
誓文したりし巻物を
一天 豊かと結わいつけ
三日に風は そよと吹き
五日にそろりと雨下り
五尺に余りし長頭
ああ振りたて ああ振りたて
振りたて振りたて 舞い込んだが
福祿寿とも囃さんせ
(ハア ミツサイナ ミツサイナ
ミツサイナ ミツサイナ)



毘沙門天 大和田涼太(小5)

ああ、七つで何事ないように
七つで何事ないように
沖の方から毘沙門天
頭に丈夫な兜置き 身には弥勒の鎧を着
持ったる御剣を振りまわし
西より東は北南
悪魔外道を打ち祓い
八方睨んで立ったるは
毘沙門天とも舞ってやれ
(ハア ミツサイナ ミツサイナ
ミツサイナ ミツサイナ)



大黒天 武田慎之介(小3)

ああ、一に大黒、二に恵比寿 三でさらば舞ってやれ
四で世並の良い歳は 心も楽で身も楽で
二六三夜の暁に 居眠りしながら街衆は
近所隣りの童と 俵遊びに眼をさまし
宝の袋は背負って 金紗の団扇であおぎたて
ああ、にっこり ああ、かっこり
にっこりかっこり笑ったが
大黒舞とも 囃さんせ
(ハア ミツサイナ ミツサイナ)

ああ、五つで泉の三郎は さんやの船に帆をあげて
月もる共に出潮の 波嶋山の淡路さに
波のあわじの嶋影や 嶋影や嶋影や
紫壇の竿にあきの糸 あきの糸あきの糸
黄金の釣をば打ちつけて 黄金の釣をば打ち込んで
沖に見えるは 鯛かスズキか白波か
(ミツサイナ ミツサイナ)



寿老人 村上楓(小1)

ああ、八つで屋敷の真ん中に
八つで屋敷の真ん中に 蓬萊山の山飾り
蓬萊山の山にはな 松と竹と梅植えて
寿老人が引立つて
鶴は千歳と秋の舞 亀は万年 春の詠
すってんこくりん たんたんぽ
たんぽたんぽ たんたんぽ
おう ゆうらり ゆうらり ゆうらりゆらり
泰平楽の舞もどし 寿老人が舞い込んだ
(ハア ミツサイナ ミツサイナ
ミツサイナ ミツサイナ)



寿老人 志田哉希(小2)



恵比寿 志田登生(小4)

ああ、おめでたいとも釣りあげたが
恵比寿舞とも囃さんせ
ミツサイナ ミツサイナ
恵比寿舞ともミツサイナ
釣りあげたるこの鯛は
こけらの色まで黄金の色
これ程の御宝
だれ様に譲るべ
かれ様に譲るべ
これはこちらの大旦那様に
千両万両 万々両の
おんめで鯛とも譲るべが
恵比寿舞とも ミツサイナ
(ハア ミツサイナ
ミツサイナ ミツサイナ)

ぼくたち、 わたしたちの七福神



大黒まい

末崎小学校三年 武田 慎之介

ぼくは、前からせふくじんをおどりたいと思っ
ていました。

お祭り練習の顔合わせの時、たかしさんに
「慎之介は、一番ねい。」

と言われて、何だろうと思っ ていたら、涼
太くんが、

「大黒まいだよ。」

と教えてくれました。ぼくは、おどれるかど
うか、不安でした。

それから毎ばん練習して、まわりの大人に、
目線や、うでの回し方などを教えてもらい、

上たっしてきたなと思えるようになってまし
た。

お祭りの日、くま野じん社でおどった時は、
きんちょうしました。でも、おどった後は、
教えてもらった事ができたと思っ、うれしかっ
たです。

お祭りが終わり、四年後はせふくじんをお
どれないのかと思っ、さみしい気持ちにな
りました。

今度は、おえや太こをおぼえて、年下の子
に、せふくじんのおどり方や、祭りを教え
てあげて、大人になっ、お父さんたちみ
たいに、せふくじんをやりたいです。



大和田優羽(小3)

村上美優(小4)

弁財天 金優花(小3)

ああ、九つこらの弁財天
九つこらの弁財天
十二単衣のみころも着
頭に戴く宝冠は 金銀玉や花飾り 白銀銚子の泉酒
この酒一杯飲む人は 四百四病の病無し
一杯飲めや鶴吉 二杯飲めや亀吉
鶴吉と亀吉と しょうなりこんなり 舞い込んだが
弁財舞とも囃さんせ
(ハア ミツサイナ ミツサイナ
ミツサイナ ミツサイナ)



大黒天 尾崎秀(小5)

ああ、十で所の大黒天 十で所の大黒天
あんまり拍子の面白さに
俵の上で驚いた 驚いた驚いた
持ったる小槌を振りまわし
一振りふれば壹万貫 二振りふれば貳万貫
三振りふれば奥知れぬ 奥知れぬ奥知れぬ
これ程の御宝 だれ様に譲るべ
かれ様に譲るべ
これはこちらのお旦那様に
千両万両 万々両の御宝を 譲るべが
大黒舞とも囃しやんせ
(ハア ミサイナ ミツサイナ
ミツサイナ ミツサイナ)

歴代★太夫

★大和田吾平治さん
(昭和25、6年頃～昭和54年頃)



★浜守辰治郎さん
(昭和55年頃～昭和57年)



★武田隆さん
(昭和58年～平成15年)



★大和田利郎さん
(平成16年～現在)

西館では、七福神の
謡いは代々ひとりの謡い手に引き継
がれます。この人を「太夫」と呼んでいます。
最初の太夫、吾平治さん以前には、舞い手の子どもたち
が踊りながら自分で謡ったもので、昭和25、6年頃に踊った
子どもたちが、自分で謡った最後の代のようなです。

恵比寿舞

末崎小学校 四年 志田 登生

ぼくは、小さいころからひいおばあちゃんに、恵比寿の歌を歌ってもらい、手作のたいと、竹を作りおどっていました。だけどひいおばあちゃんは、三月十一日に七くはってしまいました。けれどしんさい後お祭の練習がはいまりました。ぼくは、

「なに役かな」と思いました。そしてたろ小さいころからひいおばあちゃんこやっていて恵比寿だったのでぼくはとても嬉しくなりました。そしてひっしでおどって天国にいますひいおばあちゃんに見せてあげようと思いました。そしてだくさんの人たちと、ひいおばあちゃんに見てもらえて、とてもぼくはうれしいです。

四年に一回のお祭が終ってしまい、さびしいけれど、ぼくは、お祭がとても思い出になりました。

ふくろくじ

末崎小学校 尾崎 鳳伽

ぼくは、おまつりの日、セフク人をおどる日は、ぼくたちがかみさまと言われました。ぼくは、かみさまが本当にいるのかあからないけど、あの日ぼくの中にかみさまが来たのかな？

ぼくのおどりは、

頭を長く、エゲ長く、とほじまります。

ふうふの中も、むかましく、とおどると

見ている人がみんなあらります。

さいしよは、おどるのがはかしかかった。お友だちにはかにされておどらねられているんだ。と言われて、おどるのかりやになりました。

おまつりでおどる時、人がいっぱいいてとてもきんちようしました。

や、ぱりたくさむの人にわらおれました。何回目かにもうおどるのがいりになりました。後何回おどるの？と聞いていました。でも、さいごまでがムバ、とおどりました。

びしゃもんてん

末崎小学校 五年 大和田 涼太

ぼくは、びしゃもんてんをしました。祭りの日の前ちゃんとおどれるかしんばいでした。祭り当日、ぼくは、コミセンに集まりました。そしてけしようをして着がえをして準備が整った時すぐきんちようして行きました。そして祭りが始まり、歩きました。まず熊野神社で一回目をおどりました。それできんちようしなくなりました。あとこれから体力が持つか考えました。そしてかどのはま地区まで歩きました。そしてその浜で、何十分か待ってそしてからおどりました。そしてまた長い道を歩き、熊野神社まで歩きました。神社でおどり最後にスタンドでおどりました。スタンドで「おわ、たー」

とさげびました。そのとき喜びました。だから祭りをや、てよか、たです。

じやうろくじ

まっせきしようがっこう

さいしよは、ちゃんときなかたけどだんだんできるようになったです。

むかしか、たところは、おどりはじめのステップがなかなかおぼえられなくてたへんでした。でも、なんかいもれんしやうしていくうちによくできてきてよかつたです。

おまつりの日は、あさはやくからおじさんおばさんたちにはけしようやきつけをしてもらいました。ぼくは、ぞういをはいたらたかつたです。

たぐんのかきでさんちやうしました。でも、れんしやうのとムバよりまくおどれてよかつたです。

じゅうろうじん

末崎小学校 二年一組

志田 哉希

ぼくは、はじめてじゅうろう人のやくをすることになった時、とてもワクワクしました。毎日夕方になると、ごはんの後は、「さあ、練習に行くぞー」という気持ちになりました。

七ふくじんは、保育えんのころから知っていたけど、おまつりではお客さんの前でともちと二人だけおどるので、「いっぱい練習しました」。

おどる時は、手をいっぱいのはすこととか、どぶ時は思い、ギリとんでおどろうと思いましたが、

おまつりの本番では、くま野神社と、かどの浜でおどりました。いつも貝にくる人とかよりも、もっとたくさんの方がいました。みんなでいっしょうを着たのでまぢがえないでがんばろうと思えました。きんちゅうしたけど大せいこうでみんなに喜んでもらいました。

べんざいてん

末崎小学校

三年

おおわだ ゆう

わたしは、べんざいてんをやりました。さいしよはじしんがなか。たけど、みんなが、いたから、じしんが大きくなりました。

そして、お祭り当日、コミセンでは、すぐくきれいな、着物をきました。そして、たむをはいて、出発しました。歩いてい動を、して、着物だから歩きずらか。たです。くま野神社についた時、すぐきんちゅうしました。でもおど。た時すぐきんちゅうがほぐれて、おどりやすくなりました。そして、かどの浜についてきんちゅうしました。でも、いろいろな人が、おどっているの、おどろうという気持ちになりました。そして、おどつたが、気が楽になりました。そして、さいご、スタンドで、おどりました。スタンドでおど。た時は、もう気持ちは楽だから、よか。たです。そして、おわ。てコミセンで、せいこうしてよか。た。、思いました。

べんざいてん

末崎小学校三年

金 優花

わたしは、十月二十八日に、くまの神社のお祭りでも福神のべんざいてんをおどりました。

さいしよ、べんざいてんのおどりをおどると決めた時、はじめてなので、とてもどきどきして不安でした。かたがありませんでした。でも、大人の人や、お兄さんお姉さんたちにていぬいに教えてもらいおどっているうちに、いっしょうけんぬいおどろうという気持ちになりました。

本番の日がきました。けしやうをしこもらい、着物をきて、頭にはかんむりをのせてもらいました。きれいにしてもら。ことともうれしかった。神社の前でほうのうのおどりがはじまりました。いよいよわたしの番です。いまままで教えるもら。たことを考えながらべんざいてんになりきれようにながらばりました。とてもいい思い出になりました。

弁財天

末崎小学校四年

村上

美優

私は、五年祭で弁財天をしました。最初は、かんたんそうなおどりだと思。ていましたが、実際に。てみたりと。てもむかしかったです。一番むかしかったのは手の動作でした。指先の使い方が、うでの上げぐあいを覚えるのがたいへんでした。それと、足の運び方とせんの使い方もふくま。ざ。でした。お祭りまでには、ちゃんと覚えられるか不安でしたが、地区の方々や六年生のお姉さん達に熱心に教えてもら。たので、なんとか覚えることができました。

お祭り当日は、朝早くからけしやうを着付けました。本番は親客が沢山いたので、きんちゅうしたけど、せい。い。はい。おどりました。おど。た後、周りの人達からい。はい。ほめてもら。たので、練習をがんば。て良かったと思。ました。私も高学年になりました。年下の人達に教えあげたいと考えています。

思い出の出帖 写真真帖

昭和から平成にかけての
思い出深い写真を集めました

終 戦後しばらくまで、熊野神社の式年大祭は2年に1度行なうものでした。七福神や虎舞のほか伊勢節やオイトコ、カッポレ、^{かいおど}權踊りなども出て、それは華やかなもので、戦中から戦後にかけて他にこれといった娯楽がなかった時代、祭りは最大の楽しみでもありました。当時は祭りの翌日に、オハナのお礼として半日かけて各家をまわり、その後カサコシを行なったため、前日の揃え、当日、カサコシと、祭りは丸3日続きました。

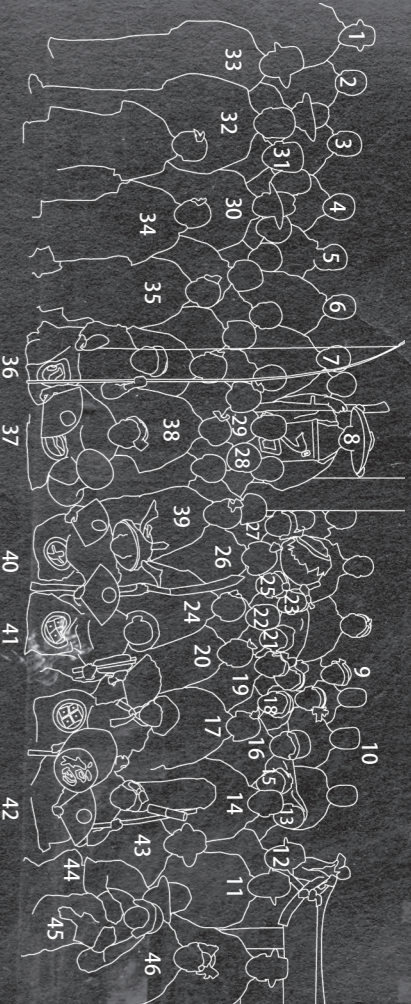
95. 昭和31年(1956)旧暦9月14日 泊里浜から海上渡御へ出る曳船と、浜から眺める観客たち(下)
沖に停泊している曳船に乗り移るため西館組のハシケが右手前から向かっている。当時、船外機はまだなく、櫓を漕いでいる。現在では曳船に乗船するのは御六尺と神輿のみだが、当時は虎舞、七福神に笛太鼓みんなで乗った。西館の旗は赤と白の2色。防潮堤がまだ造られていないため、正面やや左、曳船と曳船の間に麻腐島が見える
96. 昭和15年頃(1940)旧暦9月14日 戦時中の大祭。祭りの宿であった武田家にて(左)
写真39番の三味線弾き(源徳さん)は住田町の人で、すでに戦前から祭りの際に来てもらっていた。西館には元々シャミがなく源徳さんと呼ぶようになる前は口三味線(クチシャミセン)で踊ったものだ。源徳さんが来て伴奏がつくようになったが、やがて外から踊りの先生を頼むようになってからいわゆる昔踊り(伊勢節やカッポレ、オイトコ)に代わり新しい曲を取り入れるようになった。舞は鈴木勝治郎さん(写真2)、村上熊右エ門さん(20)、村上徳松さん(21)の3人が西館では特に上手で、七福神舞をはじめ神楽など様々な舞を舞った。まるで歌舞伎を見ているようで格好よく、ほれぼれしたものだという。写真28は外から呼んだ踊りの先生で、陸前高田の広田町から来ていたという



※()は屋号。氏名が不明な方は空欄にしてありますので判る方はご教示ください

1. 浜守未蔵 (カシハ坊)
2. 鈴木勝治郎 (中西)
3. 村上栄之助 (下新屋)
4. 村上マツミ (畑中)
5. 村上一男 (ワツチ角)
6. 鈴木フヨ子 (中西)
7. 村上吉太郎 (西の仁屋)
8. 武田テル子 (西館の大屋)
9. 村上道治郎 (和田屋)
10. 武田熊右エ門 (丸田)
11. 武田トシ子 (金山)
12. 志田勤 (お金塚)
13. 尾崎頼治 (西の大屋)
14. 村上キクオ (入古)
15. 尾崎後雄 (西の下)
16. 尾崎ミエ子 (西の仁屋)
17. 大和田吾東治 (コツチ角)
18. 浜守トクエ (カシハ坊)
19. 武田市左エ門 (金山)
20. 村上熊右エ門 (坊)
21. 村上徳松 (西之嶋)
22. 大和田千徳 (木戸脇)
23. 武田弘子 (金山)
24. 武田ヨシオ (金山)
25. 村上守 (坊)
26. 武田カオヨ (丸田)
27. 尾崎頼治郎 (西の大屋)
28. 熊谷キクオ
29. 泉田センヨ (磯沢)
30. 村上トクヨ (西之嶋)
31. 村上ウメ子 (坊)
32. 尾崎キク子 (西の大屋別家)
33. 尾崎トミ子 (西の下)
34. 村上三郎 (畑中)
35. 村上チヨ子 (ワツチ角)
36. 村上フヨ子 (権平屋)
37. 志田順子 (お金塚)
38. 村上節子 (橋本)
39. 源徳
40. 村上健治 (橋本)





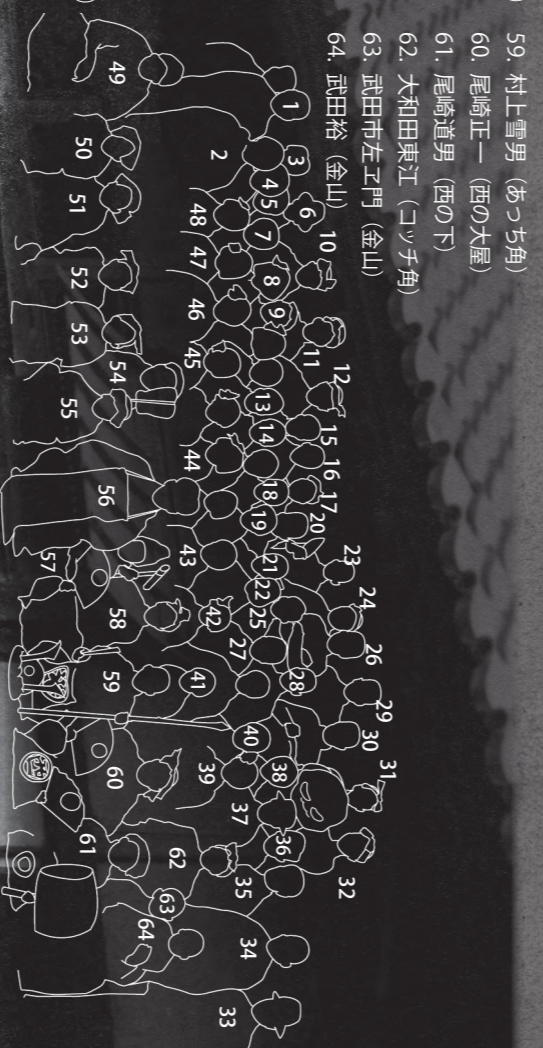
- | | | | |
|------------------|------------------|------------------|--------------------|
| 1. 大和田吾東治 (コッチ角) | 13. 鈴木勝治郎 (中西) | 25. 村上熊右工門 (坊) | 37. 尾崎正一 (西の大屋) |
| 2. 村上ツミ (畑中) | 14. 武田カオヨ (丸田) | 26. 志田順子 (お金塚) | 38. 村上チカ子 (権平屋) |
| 3. 武田テル子 (金田) | 15. 高橋三郎 (お金塚別家) | 27. 村上幸男 (ワッチ角) | 39. 武田幸子 (西館の大屋) |
| 4. 武田トシ子 (丸田) | 16. 志田勤 (お金塚) | 28. 村上ケエ子 (ワッチ角) | 40. 村上ユキオ (ワッチ角) |
| 5. 村上キエ子 (ワッチ角) | 17. 村上フヨ子 (権平屋) | 29. 村上テル子 (西之嶋) | 41. 武田貞一 (西館の大屋) |
| 6. 村上トクヨ (西之嶋) | 18. 村上守 (坊) | 30. 村上吉太郎 (西の仁屋) | 42. 尾崎政雄 (西の大屋別家) |
| 7. 浜守ヤヨエ (カンペ坊) | 19. 尾崎芳吉 (西の大屋) | 31. 武田貢 (金山) | 43. 浜守末蔵 (カンペ坊) |
| 8. (お先蔵い) | 20. 大和田タミ子 (木戸脇) | 21. 村上徳松 (西之嶋) | 32. 大和田吾平治 (コッチ角) |
| 9. 尾崎潔 (古座) | 21. 村上徳松 (西之嶋) | 22. 村上ケイオ (ワッチ角) | 33. 尾崎哲夫 (久古別家) |
| 10. 武田信一 (金山) | 22. 村上ケイオ (ワッチ角) | 23. 村上照 (西の仁屋) | 34. 尾崎勝子 (西の大屋) |
| 11. 武田貞夫 (西館の大屋) | 23. 村上照 (西の仁屋) | 24. 村上チヨ子 (ワッチ角) | 35. 尾崎ミチ子 (西の大屋別家) |
| 12. 村上一男 (あっち角) | 24. 村上チヨ子 (ワッチ角) | 25. 村上雪男 (あっち角) | 36. 村上達 (畑中) |



97. 昭和 21 年 (1946) 旧暦 9 月 14 日 終戦を迎えての大祭。祭り宿の武田家宅にて

終戦の翌年に祭りが開催された。競争に行った男衆が帰郷したかそれでも踊り手が足りず、道中行列に女衆も参加した。当時はお先蔵い(おさきぼらい)と呼ばれる役があり(写真8)、チンドン屋の格好をし、胸に踊りのプログラムをかけて行列の先頭を歩いてみんなが踊る場所を確保した。このお先蔵いは、昭和 35 年頃にスビーカーやレコードが導入されるようになってなくなってきたが、後々まで道化の格好をする習慣は残った。最後に道化役を行なったのは高橋徳三さん(屋号:お金塚別家)と記憶している。この当時は揃いの着物はなく、各自で縫って準備したが、その後しばらくしてから揃えるようになった。右端には屋台が写っている。現在は軽トラツクに屋台を載せたものだが当時は担ぐ屋台だった。

- | | | | |
|-------------------|-----------------------|-------------------|----------------------|
| 1. 鈴木勝治郎 (中西) | 16. 鈴木十七八 (中西) | 30. 尾崎潔 (古座) | 45. 尾崎滿子 (西の大屋別家) |
| 2. 武田テル子 (金田) | 17. 鈴木勝治郎 (中西) | 31. 村上照 (西の仁屋) | 46. 尾崎ノビル子 (西の大屋) |
| 3. 熊谷キクオ | 18. 志田順子 (お金塚) | 32. 村上幸男 (ワッチ角) | 47. 村上イヨ子 (西の仁屋) |
| 4. 村上トクヨ (西之嶋) | 19. 志田ヨシ子 (西館の前) | 33. 村上道治郎 (和田堂) | 48. 村上節子 (西之嶋) |
| 5. 村上ツミ (畑中) | 20. 鈴木利右工門 (中西) | 34. 大和田吾東治 (コッチ角) | 49. 尾崎芳吉 (西の大屋) |
| 6. 浜守末蔵 (カンペ坊) | 21. 佐々木トシ子 (太吉おんちゃん家) | 35. 村上健男 (橋本) | 50. 佐々木太光 (太吉おんちゃん家) |
| 7. 浜守ヤヨエ (カンペ坊) | 22. 大和田タミ子 (木戸脇) | 36. 武田貢 (金山) | 51. 尾崎春男 (西の下) |
| 8. 武田クニ子 (金田) | 23. 村上熊右工門 (坊) | 37. 尾崎啓雄 (久古) | 52. 村上弘 (ワッチ角) |
| 9. 村上徳松 (西之嶋) | 24. 村上三郎 (畑中) | 38. 村上ミエ子 (西の大屋) | 53. 浜守辰治郎 (カンペ坊) |
| 10. 尾崎坊 (西の下) | 25. 尾崎安男 (西の下) | 39. 村上信子 (橋本) | 54. 武田貞一 (西館の大屋) |
| 11. 志田勤 (お金塚) | 26. 村上栄之助 (下新屋) | 40. 武田祥子 (西館の大屋) | 55. 鈴木勝利 (中西) |
| 12. 武田信一 (金山) | 27. 村上ケイ子 (ワッチ角) | 41. 村上セツ子 (橋本) | 56. 大和田吾平治 (コッチ角) |
| 13. 村上フヨ子 (権平屋) | 28. 武田貞夫 (西館の大屋) | 42. 村上トワ子 (下新屋) | 57. 村上喜代志 (畑中) |
| 14. 村上ヤエ子 (西之嶋) | 29. 武田禎雄 (金田) | 43. 及川節子 (産婆さんか家) | 58. 村上増男 (西の仁屋) |
| 15. 大和田佐平治 (コッチ角) | | 44. 尾崎トミ子 (西の下) | |





101



100



99

99. 昭和 10 年 (1935) 旧暦 9 月 14 日、^{かいおど} 權踊り出演の記念に坊主浜にて撮影

權踊りは大祭の際に道中囃子として踊ったもの。当時、祭り宿であった西館の大屋 (武田家) から神社の参道下 (現在の下坊) までは「豊年だ万作だ」と囃子をとりながら練り歩き、シタボから神社境内までは御祝いを誂いながら權踊りをして進んだ。權踊りは主に船主の家などで出した。踊りの師匠は大和田吾東治氏。写真後列左から大和田フナオ (木戸脇)、浜守ヤス (カンベ坊)、前列左から武田トシ子 (金山)、大和田サキ子 (コッチ角)、浜守ヤヨエ (カンベ坊)

100. 昭和 35 年 (1960) 大祭の日。屋台を引く

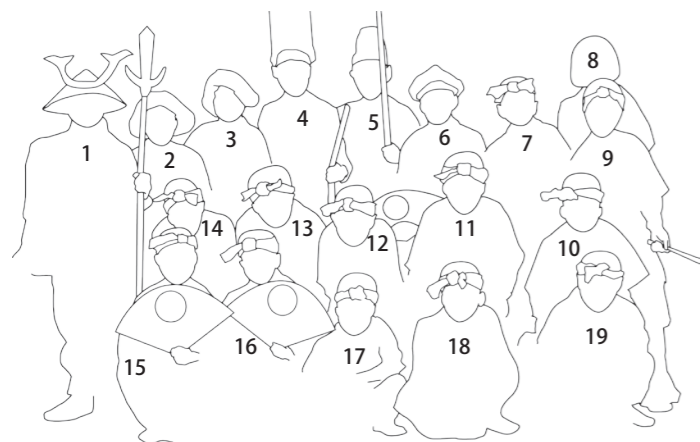
当時は車で神社境内まであがれなかったため担ぐ屋台だった。屋台にはおハナの目録が下がり、スピーカーがついている。この頃からスピーカーやマイクが使われるようになった。着物も揃いのものとなっている。踊り手、手前から及川睦子 (産婆さんが家)、大和田君恵 (コッチ角)、屋台の担い手、手前から村上義男 (権平屋)、鈴木利右工門 (中西)、志田勤 (お金塚)

101. 昭和 31 年 (1956) 大祭の日、熊野神社境内での花笠踊りの奉納

背後の「三面椿」の左側に伸びた枝は後に台風でやられて現在はない。中央で踊るのは踊りの先生。外部から先生を呼ぶ前は、大和田吾東治氏が踊りを教えていた。花笠を踊る様になった頃から西館の踊りが新しいものになっていった。屋台のすぐ右に道化 (尾崎功さん/西の下) が見える。この頃にはかつてのお先祓いのように、道化が道中の行列を先導していた。左手前の女兒・村上京子 (西の仁屋)、屋台前に立つ男性・左から村上健治 (橋本)、高橋三郎 (お金塚別家)、道化左の男児・村上満年 (アッチ角)、道化右の子を負う女性・泉田コナカ (磯沢)、その右の頬かむりの男性、鈴木利之介 (中西)

102. 昭和 35 年 (1960) 大祭の日。七福神とさいぼう振り

現在は小学生が七福神を舞うが、当時は中学生が七福神を舞い、小学生がしゃぶっこ振り (さいぼう振り) をした。弁天様は女性の手踊りと同じ衣装で、冠をつけるだけだった



- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. 尾崎博 (西の下) | 11. 武田健 (金山) |
| 2. 志田博光 (お金塚) | 12. 志田安 (上坊) |
| 3. 村上安男 (坊) | 13. 村上正博 (畑中) |
| 4. 村上弘信 (西の仁屋) | 14. 尾崎芳博 (西の大屋) |
| 5. 志田一春 (上坊) | 15. 尾崎正 (入古別家) |
| 6. 武田隆 (丸田) | 16. 尾崎敏彦 (西の仁屋) |
| 7. 武田覚 (丸田) | 17. 尾崎漁悦 (入古) |
| 8. 大和田悦子 (コッチ角) | 18. 村上俊昭 (畑中別家) |
| 9. 鈴木定勝 (中西) | 19. 武田照 (西館の大屋) |
| 10. 村上和彦 (橋本) | |



102



105. 昭和 59 年 (1984)

10 月 7 日

曳舟終了後、接岸するハシケ。後ろに見えるのは泊里浜。当時は御六尺と神輿だけでなく、屋台、虎舞、七福神、さいぼう振り、笛太鼓も乗船した。虎舞は船の上でも舞ったもので、船べりから乗り出して踊ったりする様は迫力満点だった。船に小さな梯子を載せ、その上で虎が舞うこともあった



106. 昭和 59 年 (1984)

10 月 7 日

熊野神社の参道下にて。虎舞の頭は志田保さん、尾は志田勇二さん。現在の頭は津波で被災して新調したので、その一代前の頭となる。左手奥には手踊りの女衆が待機している。海上渡御が行なわれた後、神輿が神社に還御され、解散後の写真か



107. 平成元年 (1989)

10 月 14 日

祭りの朝、熊野神社に向かう。ちょうど西之嶋 (村上家宅) の前を通っているところ。立派なシュロの木が見える。当時の屋台はリアカーに積んだもので、みんなで曳いたものだ。やはりオハナの目録をたくさん吊るし、角ぼんぼりをつけて華やかだ



103. 昭和 55 年 (1980) 御旅所の泊里浜から熊野神社へ帰る道中。種田商店と古座商店の間を通る。大雨の祭りだった



104. 昭和 55 年 (1980) 祭りが終わり、武田家へ舞い納めをしに行く道中。背景に西館の集落が写しこまれている。画面中央やや右の、切り妻屋根の建物が、今はなき西館公民館。



111. 平成元年（1989）
10月14日

御旅所である泊里漁港での七福神の奉納と、見守る地域住民。七福神舞の花形、エビス舞はこの年、志田雄人くんが務めた。鯛を持つのは村上安男さん。背景には泊里湾と泊里の家並み、箱根山がきれいに写っている



112. 平成4年（1992）
祭り当日の朝、熊野神社本殿にて。神輿の出発前に、志田隆祐宮司によるご神体入れがおそそかに行なわれた。手前が八幡神社、奥が熊野神社の神輿



113. 平成4年（1992）
泊里浜の御旅所にて、曳船出航前の神事が執り行なわれた。熊野神社の神輿（左）と八幡神社の神輿が並んでいる。たくさんのフライキがあり、祭りの華やかな雰囲気伝わってくる



108. 平成元年（1989）10月14日
大祭の朝、熊野神社へ向かって西館メインストリートを行列する。奥左手にまるたけ商店が見える

109. 平成元年（1989）10月14日
海上御渡が終わり、御召船からハシケに乗りかえて岸壁に向かっている。後ろに見えるのが神輿が乗る御召船。

110. 平成元年（1989）10月14日
武田家での舞い納め。平成のさいぼう振り、4名の勇姿。手前から及川賢、及川伸、村上正典、村上紀彦。今は就学前の子が舞うさいぼう振りを、この頃は小学校低学年が行っていた。
↓下は昭和59年のさいぼう振り





117. 平成4年(1992)
麻腐島への船渡御から帰ってきた熊野神社のお神輿が、御召船からハシケへお移りになる



118. 平成4年(1992)
曳船から戻り、熊野神社への帰り支度をする熊野神社のお神輿。背景には泊里の集落が写っている



119. 平成4年(1992)
祭りのあと。各組が熊野神社での舞い納めをし、解散となる。西館はもと祭りの宿であった武田家へ舞い納めに向かう。沖の防潮堤ができる前で、麻腐島がよく見える

114. 平成4年(1992)
碁石岬の沖合を通過するたくさんの曳船。震災前までの海上渡御では、泊里浜から出航し、碁石岬まで航行して大回りで帰って来るのが慣習だった



115. 平成4年(1992)
熊野神社の歴史を語る麻腐島と、航行する曳舟。この島に太刀や鎧冑(よろいかぶと)、獅子頭、椀、大般若などの宝物が舟に乗って流れ着き、それを泊里浜からあげて祀ったのが熊野神社の始まりとされる。舟から美しい囃子が聞こえてきて、それに聞き入った女性が洗っていた麻を腐らせたことから島の名前がついたという。泊里浜で宝物を引き上げた場所にはかつて鳥居が建っていたが、明治29年の津波で流されてしまったと伝えられる。島には、特別な島であることを示す竹が飾ってある



116. 平成4年(1992)
泊里浜の御旅所に各祭り組の屋台が終結し、郷土芸能や手踊りの奉納が始まろうとしている





平成25年10月祭りの前日、揃えの日に熊野神社前にて

写真提供 (敬称略)

武田貞一 (西館地区)

95、97、98、101、111

武田隆 (西館地区)

96、99

伊藤駿 (宇都宮大学大学院)

1、8、23、32、42、73、裏表紙裏

今石みぎわ (東京文化財研究所)

表紙、9、10、14、17、20、24、26、

29、33、35、36、43、47、51、53、54、

66、70、74、75、78、80、83、88、92

川島秀一 (東北大学)

112、119

俵木悟 (成城大学)

表紙裏、11、13、18、19、21、22、26、

37、39、41、44、46、57、65、67、69、

71、77、79、81、82、89、90、91、94

森本孝 (漁村研究家)

27、28、30、31、38、52、55、56、72、

76、93

※古写真のデジタル化に関しては前川十之朗氏、および東京文化財研究所に多大なるご協力をいただきました。

製作スタッフ

西館公民館 大和田東江

村上征一

及川宗夫

監修

(独) 国立文化財機構東京文化財研究所

無形文化遺産部

編集後記

平成23年3月11日午後2時43分に発生した地震による東日本大震災で、私たちはすべてのものを失い、悲嘆のどん底にありました。そんな中、熊野神社例大祭の開催は、私たち被災者に勇気を与え、大きな心の支えになりました。地域住民全員が心を一つにしてお祭りを準備するその姿は、地域の絆の強さそのものであります。

このお祭りには、私たちの祖父母や親兄弟も小さいころから親しんでおり、郷土芸能を通じて、世代を越えて地域の人たちが繋がることが出来る場、子どもの教育の場を提供してくれました。したがって、このお祭りの歴史を冊子というかたちで記録することによって、郷土芸能の継承への思いを共有することができると確信をいたします。

このたび、公益社団法人企業メセナ協議会の「東日本大震災 芸術・文化による復興支援ファンド」の助成をいただき、冊子の製作を行なうことができました。また資料収集・整理、聞き取り調査、編集などについては東京文化財研究所の今石みぎわ氏に全面的に協力していただきました。心から敬意と感謝を申し上げます。古い写真を提供いただきました武田貞一様、武田隆様にも改めて感謝の意を表します。

ここに皆様方のご協力により、『西館の祭りは世代を越えて』熊野神社式年五年大祭の記録』を完成することができました。何とぞご愛読くださるようお願いし、編集後記といたします。(西館公民館長 大和田東江)

平成25年度

「東日本大震災 芸術・文化による復興支援ファンド」助成事業

西館の祭りは世代を越えて

熊野神社式年五年大祭の記録

発行日 平成25年10月31日発行

編集・発行 西館公民館 (岩手県大船渡市末崎町)

印刷 (有)大船渡印刷

〒022-0002

岩手県大船渡市大船渡町字山馬越 44-1

tel/0192-26-3334 fax/0192-26-3344